

江戸小咄と中国艶笑譚：朝鮮漢文笑話集『禦眠楯』 に見える類話との比較を通して

琴, 榮辰
立教大学日本学研究所特別研究員

<https://doi.org/10.15017/19781>

出版情報：語文研究. 108/109, pp.80-94, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



江戸小咄と中国艶笑譚

—朝鮮漢文笑話集『禦眠楯』に見える類話との比較を通して—

琴 榮 辰

一 『豆談語』所収「飯簾」

武藤禎夫氏は『江戸小咄類話事典』（東京堂出版、平成八年）の中で、笑話をモチーフごとに十分類しておられる。その第十節「艶ばなし」（本稿では艶笑譚と称する）には、その源が中国の艶笑譚にあると思われる江戸小咄十話が紹介されている。^{（注1）}

そして江戸小咄の中には、その原話は確認されていないもの、その源が中国の艶笑譚に求められるものが、この他にもつとあるに違いない。本稿において紹介する『豆談語』（安永三年刊、一卷一冊）所収「飯簾」及び『福祿寿』（宝永五年刊、五巻五冊）所収「うろたへた奴の喧嘩」も、その可

能性が十分に考えられるものである。

すなわち、今回この二話の新たな類話を、宋世琳（송세림）編『禦眠楯』(이면산)（一五三〇）〈朝鮮中宗二十五、享祿三〇年前後成立、二巻一冊〉^{（注2）}なる朝鮮漢文笑話集に確認できたのであるが、そこには、この二話の源が中国の艶笑譚にある可能性を示す徴証がいくつも見られる。

そのことから、少なくともこれらの小咄二話は日本で独自に生まれたものではなく、海彼から伝わってきたものである可能性が新たに見えてきた。

そこで本稿では、江戸噺本に見えるこの二話と『禦眠楯』所収の類話とを比較する一方、その源が中国の艶笑譚にある可能性を、合わせて検討してゆきたい。まず、『豆談語』所収「飯簾」の本文を見てみよう。

りん気深い女房を持は亭主も心づかひ。谷中（筆者注・現在の東京都日暮里）へ吊ひに行、かへりに根津と出かけ、帰りかけ、是は又帰つたら、かゝめが例のやきもち。どふした物と、よいしあんを仕出し、池の端ですつぽんを買い、首を切て紙に包、袂へ入れ帰れば、亭主の顔を見るや見ず、帰りが遅ひと雷声。亭主さはがず、「これくゝやかましくいふな。今日は道で気合が悪さに、ちか付の所へ寄て世話になり、大きに手間取つた。大方わがれいのやき餅合点。此上とでもうるさいから、今日道でらせつ（男性の性器を斬ること）した」と、紙に包しやつを投出せば、囁も是はと仰天し、つゝと立て飯櫃の簾を前だれにして、忌中。

嫉妬深い女房の前で、亭主は前もつて用意した鼈の首を投げる。そして、この芝居にまんまと騙された妻は、飯櫃の簾を下着の前垂れにして亭主の性器の喪に服するという艶笑譚である。

武藤氏の前掲書によれば、この話の類話としては『古今著聞集』（二十卷十冊）卷十六〈興言利口第廿五〉所収第五四七話「蔵人某の妻珍素服の事」が指摘できるといふ。その本

文を掲出すれば、次の通りである。

或なま蔵人の妻の、いと物ねたみするありけり。男あぢきなき事にして、いかゞして此女にはなれなんとおもひけれど、さすが又宿世つきねば、ながらへてすぐしければ、ある事なきことにつけて、さいなまれてのみ年をくくりけり。男案じめぐらして、①龜を一もとめて、くびを引出て、三四寸がほどを切てけり。紙につゝみて、ふところ引かくしてもちつ。妻と又ことをあやまちていさかひて、たがひにさまぐにいひて、男いふやう「せむずる所かやうの口舌のたえぬは、これゆへにこそ」とて、刀をぬきて、をのれがまらをきるよしをして、ふところにもちたる龜のくびをなげいだしたりけり。ちみどろなる物の三四寸ばかりなれば、其物にたがはざりけり。妻あさましげになりて、「おほかたの道理をこそ申つれ、これ程ににがく敷おもひとり給べき事かは」とてくひにがみてあたり。さて、「いまは心やすくおぼせ。かくふすべられてのみすぐせば、人ぎゝも見ぐるしうあぢきなき事なれば」といひければ、かたきはうちつとて、そのきれひきそばめて、たちのきにけり。其後、しばしは此疵のあとやむ由して、うちふしてのみすぐしけり。②

さて、月比経て、女ひるつれぐなりけるに、はぬいといふ物して、うずくまりておたりけるを見れば、またの程にくろき布を引まとひたりけり。男あやしとおもひて、「それなるくろき物はなにぞ」と問へば、女は「たゞ」といひて、とかくこたふる事なし。あながちにとひければ、かくしはつべきことならねば、「これは故ひとのためよ」とこたへけり。其心をえずして、「故ひとは何ぞ」と問へば、「きは、きりて捨給し故人がために、いかでかはこゝに素服させざらんとて、服きせたるぞかし」といひけり。めづらしかりける素服也。おもかげをしはかられて、をかしくこそ侍れ。

『古今著聞集』に類話が見られることから、『豆談語』に見えるこの艶笑譚は、はるかに遡つて、『古今著聞集』が成立した建長六（一二五四）年以前にはすでに日本で形成されていたことになる。

両者を比較すると、『豆談語』では「鼈の首」だったのが、傍線部①では「亀の首」になっており、『豆談語』では一日の出来事として描かれていたのが、傍線部②では一ヶ月以上にかけての出来事として描かれているなど、多少の違いは見られるものの、著しい類話関係が認められる。

とはいえ、これ以上に類話を探り出すことは従来できなかったのであるが、今回、『禦眠櫛』所載の「斫鼈頭」（鼈ノ頭ヲ斫ル）がその類話であることが確認できた。以下に詳しく検討を加えてみよう。

二 『禦眠櫛』所収「斫鼈頭」

本話は従来、紹介されたことを聞かないので、ここにその全文を掲げておく。

有一朝官、喜躡梨園。室人劇妬、朝官患之。一日袖鼈頭就内、室人又勃礫。朝官伴憤大語曰、①「凡男兒被妬、皆由阿物。如非阿物、必無是患」。遂索刀奄作斫鳥之状、即投鼈頭于庭。室人大呼而前、把腰痛哭曰、②「我縦妬悍、胡至此耶」。乳媪走就庭中、諦視疾呼曰、③「這物二眼而色斑、必非陽頭。勿憂、勿憂」。室人大笑不復妬。

一朝官（筆者注・朝廷官吏）有り。喜ク梨園（もともと演劇界のこと。ここでは吉原のような遊郭の意味合い）ヲ躡ム。室人劇シク妬ミ、朝官之ヲ患フ。一日、鼈ノ頭ヲ袖ニシテ内ニ就ク。室人、又勃礫（争つて対立するこ

と)ス。朝官あすかみ伴いっはリテ憤ふんシ、大イニ語リテ曰ク、①「凡おほソ男兒ニシテ妬マルルハ、皆みなナ阿ノ物あ(男の性器のこと)ニ由ルナリ。如シ阿ノ物非ズンバ、必ズ此ノ患わざらヒ無カラシト。遂つひニ刀ヲ索もとメテ、奄おほヒテ鳥ヲ斫きル状ヲ作り、即チ鼈ノ頭ヲ庭ニ投なゲケリ。室人、大イニ呼ビテ前すミ、腰ヲ把リテ痛哭シテ曰ク、②「我レ縦たどヒ妬ムコト悍はげシクトモ、胡なんゾ此ニ至ランヤ」ト。乳媼にゅうおう、走リテ庭中ニ就キ、諛視くしシテ疾ク呼ビテ曰ク、③「這ノ物ハ二眼ニシテ色斑まだらナリ、必ズシモ陽頭ニ非ズ。憂うれフルコト勿レ、憂フルコト勿レ」ト。室人、大イニ笑ヒテ復まタトハ妬マズ。

最初は夫の芝居に驚いた嫉妬深い妻が、後には胸を撫で下ろすとともに嫉妬をやめたというもので、こうした妻の滑稽な姿が笑いを醸し出す艶笑譚と言えよう。

本話を『豆談語』や『古今著聞集』の話と比較すると、亭主と女房の他に第三者の「乳媼」(乳母)が登場したり、『古今著聞集』では「亀の首」だったのが「鼈の首」になっていたり、結末が異なったりするなど、いくつもの違いは見られるものの、三者が話柄的に一致することは、一見して明らかである。

特に、『禦眠楯』と『古今著聞集』との間には、両話が同

源である可能性を示す徴証が見出せる。まず、夫の言葉に注目してみよう。

「せむずる所かやうの口舌のたえぬは、これゆへにこそ」

(『古今著聞集』)

「凡ソ男兒ニシテ妬マルルハ、皆ナ阿ノ物ニ由ルナリ」

(『禦眠楯』)

夫婦喧嘩や嫉妬の原因は全て自分の性器にあるとする夫の言葉が、両者に共通している。さらに、妻の言葉を比較してみると、

「おほかたの道理をこそ申つれ、これ程ににがく敷おもひとり給べき事かは」

(『古今著聞集』)

「我レ縦ヒ妬ムコト悍シクトモ、胡ゾ此ニ至ランヤ」

(『禦眠楯』)

いずれも夫の性器が斬られたと信じ込んだ妻が嘆く場面であるが、ここに見える妻の言葉の類似からも、両話が同源である可能性が看取できよう。してみると、『古今著聞集』の艶笑譚は、海彼からいち早く日本にもたらされたものである

可能性が出て来よう。

ただし、十六世紀半ば頃に成立した『禦眼楯』所収の艶笑譚が、それより三百年程前に成立した『古今著聞集』に影響を与えるということはあり得ない。

従つて、ここでは、両者に影響を与えた共通の原話がそもそも中国にあつて、それが両国にそれぞれもたらされた可能性をまず想定すべきであろう。『禦眼楯』に散見する艶笑譚の多くが中国種であることからすれば、この話の源も中国の艶笑譚にある可能性も、一概に否定はできない。

たとえば、『禦眼楯』所載の「処艾扱良」（処艾〈処女〉、良〈新郎〉ヲ扱フ）という艶笑譚は、その類話が清の遊戯主人纂輯『笑林広記』（一七六六〈明和三〉年成立、十二卷四冊）〈閨風部〉所収「両坦」にも見られる^{〔注6〕}。

また、同書所載の「五子嘲父」（五子、父ヲ嘲ル）が中国の民話にも存することは、注2に掲げた拙論で別途詳しく述べた通りである。

さらに、同書所載の「非指村」（指ニ非ザル村）なる艶笑譚の場合、中国の原話は確認されていないものの、『きのふはけふの物語』（寛永十三年刊本、二巻二冊）下巻第五十五話にその類話が見られることから、これもやはり中国からもたされたものである可能性が十分に考えられる。

そこで、『豆談語』と『古今著聞集』、そして『禦眼楯』に見えるこれらの類話の源が中国の艶笑譚にある可能性について、具体的に検討を加えてみることにしよう。

三 中国艶笑譚とのモチーフの類似

前節に挙げた『禦眼楯』所収「斫鼈頭」の本文に見える乳母の言葉（傍線部③）には「二眼」という表現が見られるが、これが中国艶笑譚特有の、男性の性器を譬えて「一眼」と表現することを踏まえてのものであることに、まず注意する必要がある。

たとえば、『笑林広記』〈形体部〉所収の「独眼」なる笑話には、性器を水蛇に咬みつかれた兄が弟に、「眼が一つあるものは性器だから斬るな」と注意する場面が見られる。そしてそこには同時に、蛇の頭を「両眼」であるとする表現が見られる。

兄弟二人同往河中洗浴。兄之陽物被水蛇咬住、扯之不脱。弟持刀欲砍。兄曰、「仔細看了下刀。兩眼的^{〔注7〕}是蛇頭、独眼的^{〔注8〕}是寮子」。

兄弟二人、同ニ往キテ河ノ中ニテ洗浴ス。兄ノ陽物、水蛇ニ咬ミ住マレバ、之ヲ扯クモ脱セズ。弟、刀ヲ持チテ砍ラント欲ス。兄曰ク、「仔細ニ看テ刀ヲ下セ。両眼ノモノハ是レ蛇ノ頭ナリ。独眼ノモノハ是レ寮子ナリ」ト。

逃せない。

兩脚山中有小池、池南池北草離離、無風白浪翻天起、一目朱龍出入時。

『禦眠楯』に見える「二眼」という表現が、「両眼」の蛇の頭と対比して性器を「独眼」に譬えるこうした表現を前提としてできたものであることは容易に窺えるところであろう。

こうした中国艶笑譚特有の表現は、早くに日本と朝鮮にも伝えられていたとみられる。たとえば、『一休閑東咄』（寛文十二年刊、三卷一冊）下巻、第十四「狂詩」の条には、「題淫門」なる猥雑な狂詩が見え、そこには、男性の性器を「一目朱龍」に譬えた次のような表現が見られる。

兩脚山中有小池、東西南北草離離、無風白浪起烟波、一目朱龍出入時。

しかも右の狂詩が、成汝学（성여학）編『続禦眠楯』（今一巻一冊・三十二話所収）なる朝鮮漢文笑話集に所収される「灌夫人伝」という艶笑譚にも見出せるものであることは見

この狂詩の原拠は不明であるが、日韓両国の文献にともに見られることや、「一目」という中国艶笑譚特有の表現が見えることから、その源は中国にあるのではないかと想像される。以上のように、『禦眠楯』所収「斫鼈頭」に見える「二眼」なる表現は、こうした中国艶笑譚特有の表現に由来するものであると考えられる。

また、「性器を斬る」というモチーフについてであるが、これも中国艶笑譚では非常にポピュラーなものである。

たとえば、明代に成立した『如意君伝』（十六世紀中期以前成立か、一巻一冊）の和刻版である清閨閣版『則天皇后如意君伝』（玉曆十三年刊、一巻一冊）なる一書には、性器を斬ろうとする愛人（敖曹）を止めようとする武太后の姿を滑稽に描いた場面が見られる。その梗概を簡単に示せば次の通りである。

①敖曹は宮中から追い出されている太子（廬陸王）を呼

び戻すよう、武太后に陳情する。

② 武太后が難色を示すと、赦曹は匕首で陽物を切り落とそうとする。

③ 驚いた武太后はそれを止め、赦曹の願いを聞き届ける。

こうしたモチーフは、他にも多く、『笑林広記』〈形体部〉所収「截長」などは、その好例である。

夫問妻曰、「此物還是長的好短的好」。妻美好長、而故底之曰、「短的好」。夫曰、「這等我的太長。不如截去一段」。持刀便砍。妻爰急止之曰、「雖則長了些、却是父母生就的遺体、一毫也動不得」。

夫、妻二問ヒテ曰ク、「此ノ物ハ還^まタ是レ長キモノヲ好ムヤ短カキモノヲ好ムヤ」。ト。妻美ハ長キヲ好メドモ故ニ之ニ応ジテ曰ク、「短カキモノヲ好ム」。ト。夫曰ク、「這等我ガモノハ太クテ長シ。截^たチテ一段ヲ去スニ不如^{しか}ズ」。ト。刀ヲ持チテ便^{すなは}チ砍^きラントス。妻、爰^ま急^{きゅう}（筆者注・飛ぶように急ぐさま）ニ之ヲ止メテ曰ク、「則チ長シト雖モ了^{つひ}ニ些^{ちか}ナリ。却ツテ是レ父母ヨリ生マレナガラ就キタル遺体ナレバ、一毫タリトモ動スヲ得ズ」ト。

性器を斬るふりをする夫と、それに驚いて止める妻の姿が笑いを醸し出す艶笑譚であるが、こうしたモチーフが中国艶笑譚では非常にポピュラーなものであることが知られよう。

そして、こうしたモチーフが『禦眠楯』にも用いられている。同書所収「竊妻誑夫」（妻ヲ竊^{ぬす}ミテ夫ヲ誑^{あざわ}カス）に見える、夫が間男の性器を斬ろうとする場面がそれである。その話の前半部だけを掲出すれば、次の如くである。

有無頼子、竊人之妻。常瞰夫他適、壁穴納莖。女從内兩手據地、俯而北合。日以為恒。一日女出外、夫抱小兒独坐。無頼子認女在内納莖。兒蹴父指之曰、「父乎、爾見吾母、掛玉門朱杙乎」。夫猝前拉之、索刀急^{（注）}。

無頼子有リテ、人ノ妻ヲ竊^{ぬす}ム。常ニ夫ノ他ニ適^ゆクヲ瞰^みテ、壁ノ穴ニ莖ヲ納ム。女、内ヨリ、兩手モテ地ヲ據^{よきとら}ニ俯シ、北キテ合ス。日以テ恒ト為ス。一日、女外ニ出ツ。夫、小兒ヲ抱ヘテ独坐ス。無頼子、女ノ内ニ在ルト認メテ莖ヲ納ム。兒、父ヲ蹴リテ之ヲ指シテ曰ク、「父ヤ、爾見吾ガ母ノ玉門ヲ朱キ杙ニ掛クルヲ見ルヤ」ト。夫猝^{すみや}カニ前^{まへ}ニテ之ヲ拉キ、刀ヲ索メテ急^{いそ}グ。

性器を斬られそうになつた間男が夫を騙して逃げ切るといふ結末が笑いを催す艶笑譚であるが、この話の原話と思しき話が唐代の陸龜蒙撰『笑海叢珠』（三卷一冊）卷之二、〈芸術門〉所収「隔壁講歡」（壁ヲ隔テ歡ヲ講ズ）として存するところから、この話はその源が中国の艶笑譚であると見られる。そこには次のようにある。

有一少年。見隣居女子絶色、意欲得之。女見少年、心中亦喜。両意綱繆、不能相聚。後於隔壁通情。相期於壁孔中講歡。一日男子聞女子之声即以鶴児置壁孔中。女人忽被驚人散。有僕後至、只見鶴児在壁孔中。即以針一枚挿於其上。男子叫声…。

一少年有り。隣二居ル女子ノ絶色ナルヲ見テ、意ニ之ヲ得ント欲ス。女少年ヲ見テ、心中ニ亦タ喜ブ。両意綱繆スルモ、相ヒ聚ルコト能ハズ。後二壁ヲ隔テ情ヲ通ズ。壁ノ孔ノ中ニ講歡スルヲ相ヒ期ス。一日男子女子ノ声ヲ聞ケバ、即チ鶴児ヲ以テ壁ノ孔ノ中ニ置ク。女人忽チ被ムルモ、人ニ驚キテ散ル。僕ノ後ニ至ル有リテ只ダ鶴児ノ壁ノ孔ノ中ニ在ルヲ見ル。即チ針一枚ヲ以テ其ノ上ニ挿ス。男子、声ヲ叫ビテ…。

以上から、「性器を斬る」といったモチーフの共通性や、「一眼」「二眼」という表現の由来を考えると、『禦眠楯』所収「斫鼈頭」は、その源は中国の艶笑譚である可能性が十分に考えられよう。

こうした推定が正しいとすれば、その類話である『豆談語』および『古今著聞集』の所収話の源についても、中国の艶笑譚へと遡らせる必要が出てくるであろう。

四 『福祿寿』所収「うろたへた奴の喧嘩」

次に、『禦眠楯』から新たな類話が確認できたもうひとつの江戸小咄についても、検討を加えてみよう。次に掲げるのは『福祿寿』（宝永五年刊、五卷五冊）卷三所収「うろたへた奴の喧嘩」であるが、一見したところでは、中国の艶笑譚とは何の関係もないもののように見える。

さる奴、ふとしたる事よりいひあがり、互に抜合ひ、一人は頤を落とされ、また一人は踵を切落され、互に手を負ひし折から、辻番衆立出、両方共に鎮められければ、是非なくとまり、詮方なく、せめて此切落されしを拾、歸りてつぎ申すやうに養生せんと思ひ、兩人ながら、互

に此心にて拾帰りける。夫より外科本道ほんちうにかゝりければ、つぎたる所も早速癒いえて、元の如くなほりけるが、不思議ふしぎなほりたると思へば、一人の踵には髻あかがりがはえ、又一人の頤には、冬になれば髻あかがりがきれける。よく／＼思へば、いそがし紛れに取帰りしゆゑ、とり違へた物であるう、さて／＼頤と踵はよく似たものぢや。(註)

この話は、外科の継ぎ違えの結果で起きた現象が笑いを醸し出す滑稽譚であるが、武藤禎夫氏によれば、狂言「井礪」に見える謡曲の語り「平家」にも右と類似する内容が存するといふ。(註)山脇和泉家の台本とされる『狂言六義』（寛永・正保年間書写、三卷三冊）下巻第四十五曲「井礪」に見えるその該当箇所を引用すれば次の通りである。

…そも／＼一の谷の合戦破れしかば、源平互いに入乱れ、逃ぐる者の、踵を斬らるゝ者もあり、掛かる者の、頤を斬らるゝ者もあり、忙しき時の事なれば、踵を取つて頤に付け、頤を取つて踵に付けたれば、生ようず事と、踵に髻あかがりが、むつくり／＼と、生へたりけり、冬にもなれば、切れうず事と、頤に輝ほが、ほつかり／＼と、切れたりけり(註)と、語…。

傍線部に見える滑稽な表現の一致から、両者は同源であることが容易に察せられよう。そして今回、右と発想の面で非常に似た表現を『禦眠楯』所収の艶笑譚に確認できた。

ここにおいて、『禦眠楯』との類似性が認められるとすれば、このような滑稽な表現も海彼から伝えられた艶笑譚の影響によるものである可能性が十分に考えられよう。

五 『禦眠楯』所収「鼻陽誤黏」

今回確認できた『禦眠楯』の艶笑譚とは、民俗資料本下巻所載の第三十九話「鼻陽誤黏」(鼻ト陽ヲ誤チテ黏ル)である。次にその全文を掲出する。

一悪少年、嘗乗微月、裸身抵隣家、而窃鶏。適鷄峙、在寢窓外簷端。主翁臥其内而見窓間、則隱隱有人影。「必是盜也」。索得鉢子、開窓剝擊、相去稍迥、才中鼻端與陽頭。悪少年不暇出声。俯拾両肉、而遁去。意謂「凡割処熱血可黏」。走而伝之。因夜暗故、忽遽誤以鼻端伝莖頭、以莖頭伝鼻端。由是若偶然遇香辛、陽頭大動。若近玉門、鼻端大揺。(註)

一悪少年、嘗テ微月ニ乗ジテ、裸身ニシテ隣ノ家ニ抵リテ鶏ヲ窃ム。適マ、鶏ノ疇、寝窓ノ外ノ簷ノ端ニ在リ。主ノ翁、其ノ内ニ臥シテ窓間ヲ見レバ、則チ隱隱トシテ人ノ影有リ。「必ず是レ盗ムナリ」ト。鉢子ヲ索メ得テ、窓ヲ開キテ刺撃スルモ、相ヒ去ルコト稍迫ク、才カニ鼻ノ端ト陽頭ニ中ル。悪少年、声ヲ出ス暇モアラス。俯シテ両肉ヲ拾ヒ、而シテ遁レ去ル。意ヒテ謂フ、「凡ソ割カルル処血熱クテ黏グベシ」ト。走りテ之ヲ伝グ。夜ニ因リテ暗キ故ニ、忽遽ニ誤チテ鼻ノ端ヲ以テ莖頭ニ伝ギ、莖頭ヲ以テ鼻ノ端ニ伝グ。由リテ是レ若シ偶然ニ香辛ニ遇ヘバ、陽頭大イニ動ク。若シ玉門ニ近ツケバ、鼻ノ端、大イニ揺ルト。

盗みに入つた少年は主人の投げた金属性の鉢に性器と鼻の先を斬られてしまう。慌てて縫合したものの、継ぎ違えてしまったため、その後、いい匂いがあると少年の性器が反応し、きれいな女性が近くにいると今度は少年の鼻が反応するようになったという艶笑譚である。

そして、『福祿寿』および狂言「井碓」に見える「頤」と「踵」の継ぎ違えと、右の傍線部に見える「鼻」と「陽頭（性器）」の継ぎ違えが、発想的に非常に似ているのである。

もちろん、『禦眼楯』所収のこの艶笑譚が狂言「井碓」などに直接影響を与えたことを示す証拠がないため、この話が朝鮮から日本に直接もたらされたとは断定できない。

それでも、「性器を斬る」という中国艶笑譚特有のモチーフが見られる点や、『禦眼楯』そのものに中国艶笑譚との浅からぬ影響関係が窺えることを合わせ考えれば、むしろこの話の源は中国の艶笑譚にあつて、『禦眼楯』に影響を与えた中国の原話が日本にももたらされ、狂言「井碓」などに影響を与えたと見ることもできるのではあるまいか。

六 中国艶笑譚との人物構成の類似

『禦眼楯』の話の源が中国の艶笑譚にある可能性を示す微証としては、まず「少年」が登場するという人物構成が挙げられる。『禦眼楯』の話には、性器を斬られてしまう「少年」が登場するが、同様のモチーフが見える前掲の『笑海叢珠』所収「隔壁講飲」にもやはり「少年」が登場していたのである。

一少年有り。隣ニ居ル女子ノ绝色ナルヲ見テ、意ニ之ヲ得ント欲ス…。

艶笑譚に「少年」を登場せしめるこうした人物構成が、中国の艶笑譚に特有のものとは限らないが、中国には「少年」が登場する艶笑譚が豊富で、こうした人物構成をもつ中国の艶笑譚がいちはやく日本と朝鮮にもたらされ、影響を与えたのみであるらしい。

たとえば、無住著『沙石集』巻七、第一話「嫉妬ノ心無キ人ノ事」の別本拾遺には次のような艶笑譚が見える。

旧き物語に、ある男、他行の時、間男もてる妻をしるし付けんとして、隠れたる所に牛を書きてけり。さる程に、まめ男の来るに「かかる事なんあり」と語りければ「我も絵はかけば書くべし」とて、さらば能くくみて、もとの如くも書かで、実の男は臥せる牛をかけるに、間男は立てる牛をかきてけり。さて夫、帰りて見て「さればこそ。間男の所為にこそ。我かける牛は臥せる牛なるに、是は立てる牛なり」と叱りければ「あはれやみ給へ。臥せる牛は一生臥せるか」といひければ「さもあるらん」とて許しつ。

南方熊楠によれば、この話は『笑林広記』巻七、〈世諱部〉所収「換班」などにも類話が見られる、いわば中国から伝来

した艶笑譚であるという。^(注19) このような艶笑譚は朝鮮にももたらされ、前掲の『続禦眠楯』に見えるその類話「蚩氓弁鹿」(蚩氓ちまが、鹿かヲ弁ス)には、間男として隣の「少年」が登場する。

一村氓得美婦惑之。一日臨出慮或有奸。画臥鹿於女之陰岸以標之。隣少瞰氓出欲私之。^(注20)

一村ノ氓なま、美婦ヲ得テ之ニ惑フ。一日、出ヅルニ臨ミテ或ハ奸スルコト有ルヲ慮リテ、女ノ陰岸ニ臥シタル鹿ヲ画キ、以テ之ヲ標トス。隣ノ少、氓ノ出ヅルヲ瞰シテ之ト私セント欲ス…。

隣の「少年」が間男として登場するというこうした中国艶笑譚の人物構成は、日本と朝鮮にもたらされた他の話からも見ることができると。

たとえば、『奇談新編』(天保十三年刊、一卷一冊)所収の次の愚夫譚に間男として登場する「少年」はその好例である。

有夫婦居室者。其婦淫蕩与隣少年私焉。一夕托婦寧而出往見少年。遇之於路是夜雨雪北風砭肌。婦曰。「顧無宿

処。如之何」。少年素与其夫相狎。乃詣其家謂夫曰、「我誘一処女来。今夜令内幸而不在。願以貴宅假我。事濟厚報兄矣」。夫曰、「諾」。少年曰、「子暫時為我避哉」。夫又許之。夫將出于門。婦就暗処袖面而立。夫不曉。戲拊其背曰、「畜生」。

夫婦、室ニ居ル者アリ。其ノ婦、淫蕩ニシテ隣ノ少年ト私ス。一夕、婦寧（筆者注・嫁入りした娘が実家に帰って両親の安否を問うこと）ニ托シテ出テ、往テ少年ヲ見ル。之ト路ニ遇フモ、コノ夜、雷雨北風肌ヲ砒ス。婦曰ク、「顧ミルニ宿ル処ナシ。之ヲ如何ニセン」ト。少年、素ト其ノ夫ト相狎ル。乃チ其ノ家ニ詣リ、夫ニ謂ヒテ曰ク、「我、一処女ヲ誘ヒ来ル。今夜、令内（奥さんのこと）ハ幸ヒニ不在ナリ。願クハ貴宅ヲ我ニ假セ。事濟ラバ兄ニ厚ク報ゼン」ト。夫曰ク「諾」ト。少年曰ク「子、暫時我方為ニ避ケヨ」ト。夫、又之ヲ許ス。夫、門ヨリ出デントス。婦、暗処ニ面ヲ袖シテ立ツ。夫、曉ラズ。戲レニ其ノ背ヲ拊シテ曰ク、「畜生」ト。

隣の「少年」は愚かな亭主に部屋を貸してほしいと願っているが、少年の相手が自分の妻とも知らず部屋を貸してしまう

亭主の愚かさが笑いを醸し出す愚夫譚である。

間男として隣の「少年」が登場するこの話は、成俔（성현）（一四三九〜一五〇四・号は慵齋）という朝鮮文人の手による『慵齋叢話』（용재총화）（一五二五〈朝鮮中宗二十、大永五〉年刊、三卷三冊）にもその類話が見られるが、そこにも同じく、間男として「少年」が登場する。

京中又有盲。與一年少友善。年少一日来云、「路逢小艾欲叙話。主人幸借別室」。盲許之。年少遂與盲妻入別房為纏縷。盲來巡窓外曰、「何久、何久。速出、速出。家婦若來見之。大是異事。受譴必矣」。少焉妻自外至曰、「此間有何処客蹤」。如有憤怒之状。盲曰、「卿聽我言。日午但東隣辛生來訪我耳」。

京中ニ又盲有リ。一年少ト友トシ善シ。年少一日来タリテ云フ、「路ニ逢ヒタル小艾（筆者注・若くてみえうるしい少女のこと）ト話ヲ叙ベント欲ス。主人ハ幸フニ別室ヲ借セ」ト。盲之ヲ許ス。年少、遂ニ盲ノ妻ト別ノ房ニ入りテ纏縷ノ欲ヲ為ス。盲来タリテ窓外ヲ巡リテ曰ク、「何ゾ久シ、何ゾ久シ。速力ニ出ヨ、速力ニ出ヨ。家婦ノ若シ来リテ之ヲ見レバ大イニ是レ異シム事ナリ。受譴

スルコト必ズナリ」ト。少クシテ妻外ヨリ至リテ曰ク、
「此ノ間、何処ニ客ノ蹤有ル」ト。憤怒ノ状ノ有ルガ如ク
クス。盲曰ク、「卿ハ我方言ヲ聴ケ。日午ニ但シ東ノ隣
ノ辛生（辛氏のこと）ノ我ヲ来訪セシノミ」ト。

これが話柄的に前掲の『奇談新編』の愚夫譚と同類のものであることは論を俟たないだろう。中国の原話を確認してはいないものの、日韓両国にその類話が見られることや、『笑海叢珠』の艶笑譚などにも間男として「少年」が登場することなどを合わせ考えれば、この話の源が中国にあると見ることは不自然ではない。

艶笑譚に「少年」が登場するという人物構成が見られる場合、その話の源は中国にある可能性が高いといえるならば、性器に危害を加えるという中国艶笑譚に一般的モチーフが同時に見られる『禦眼楯』所収「鼻陽誤黏」の源は、まずは中国の艶笑譚に求められることになるう。

この推定が認められれば、『福祿寿』の「うろたへた奴の喧嘩」および狂言「井礪」に見える滑稽な表現は、『禦眼楯』に影響を与えた中国の艶笑譚から来た可能性も十分に考えられるのではなからうか。

石崎又造氏は早くに、「支那笑話の翻訳と漢文笑話の発生」

（『近世日本に於ける支那俗語文学史』〈弘文堂書房、昭和十五年〉所収）の中で、『狂言記』などに見える六作品（宝の笠、「土産の鏡」、「料理智」、「附子」、「成上者」、「魚説法及骨皮新発地意」）は口承の形で日本にもたらされた中国笑話の影響によるものであることを指摘しておられる。

そして今回、狂言「井礪」に見える滑稽な表現が中国の艶笑譚から来た可能性を見出したことによって、われわれは氏の高論に頷かざるを得なくなった。

以上、『禦眼楯』から新たに確認できた類話との比較を通して、『豆談語』および『福祿寿』に見える小咄二話が中国の艶笑譚の影響を受けた可能性を追究してみた。加えてそこには、『古今著聞集』に見える艶笑譚や、狂言「井礪」に見える滑稽な表現についても、それらが中国の艶笑譚から来たものであることを窺わせるものがあつた。

本稿で取り上げた『禦眼楯』は、従来全く注目されることのなかつたものであるが、中国の艶笑譚が朝鮮笑話集や江戸噺本、さらには日本の説話集や狂言などに及ぼした影響の一端を垣間見させてくれる貴重な資料であると言ふことができよう。

注

注1

武藤氏が示したのは、以下の通りである。

①『醒睡笑』(元和九年序、八卷八冊)巻七〈癡忘〉第五話

——『笑苑千金』巻四「両脚猫」

②『きのふはけふの物語』(寛永十三年刊、二巻二冊)上巻第七十七話

——『笑府』〈閨風部〉「嘔兒」

③『当世手打笑』(延宝九年刊、五巻五冊)巻四「行水して蛇に食はるること」

——『笑林広記』〈形体部〉「瞎眼」

④『口拍子』(安永二年刊、一巻一冊)「嫁の乳」

——『笑府』〈閨風部〉「父子倫理」

⑤『さしまくら』(安永二年刊、一巻一冊)「問番」

——『笑府』〈閨風部〉「婿呼痛」

⑥『仕形咄』(安永二年刊、一巻一冊)「爺と婆」

——『笑府』〈広萃部〉「老翁」

⑦『今歳咄』(安永二年刊、一巻一冊)「衆道」

——『笑府』〈広萃部〉「对穿」

⑧『笑顔はじめ』(天明二年刊、一巻一冊)「髻二人」

——『笑林広記』〈閨風部〉「両坦」

⑨『豆だらけ』(安永四年刊、一巻一冊)「磁石」

——『笑海叢珠』巻一「隔壁講飲」

⑩『落嘶笑種時』(安政三年刊、一巻一冊)「密男」

——『笑府』〈謬誤部〉「米」

注2

『禦眠桶』について詳しくは、拙稿「東アジアにおける『和尙と小僧譚』の伝播——『禦眠桶』、『莫葉志諧』の類話新資料をめぐって——」(『Comparatio』vol.13〈九州大学大学院比較社

会文化学府比較文化研究会、二〇〇九)を参照されたい。

注3

引用は武藤禎夫編『嘶本大系』(東京堂出版、昭和六十二年)第十一巻に翻刻された『豆談語』による。

注4

引用は永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系八十四』『古今著聞集』(岩波書店、昭和四十一年)による。

注5

引用は東国大学附設韓国文学研究所編『韓国文献説話全集』七(民族文化社、一九八一年)に影印された『禦眠桶』による。底本は高麗大学所蔵写本。ただし、民俗資料本との校合を行い、明らかに誤字と認められるものは改めた。

注6

『笑林広記』の話の梗概を簡単に示せば次の通り。①婚期を迎えた娘に、お金持ちだが不細工な男と、貧乏だが顔立ちのいい男のどちらを新郎に選ぶかと親が聞く。②娘は、昼はお金持ちの家で、夜は美男の家で暮らすと答える。『禦眠桶』に見られる類話の梗概は次の通り。①ある人の娘に、文士、武士、長者、精力抜群の男の四人が婚姻を申し出る。②娘は、文士は筆禍、武士は戦死、長者は洪水による破産の心配があるが、精力抜群の男は気に入ったと答える。武藤氏は『江戸小咄類話事典』のなかで、『笑林広記』に見えるこの話の類話が『笑顔はじめ』所収「髻二人」にも存することを指摘しておられ、この話が東アジアにおいて広範な伝播を見せた国際的な艶笑譚であることが知られる。詳しくは同書二一六頁を参照。

注7

引用は陳維礼・郭俊峰編『中国歴代笑話集成』(時代文芸出版社、一九九六年)第四巻に翻刻された『笑林広記』による。底本は乾隆四十六(一七八一、天明一)年刊本。

注8

引用は注3の前掲書第三巻に翻刻された『一休閑東咄』による。

注9

引用は注5の前掲書に影印された『続禦眠桶』による。底本

は高麗大学所蔵写本。

注 10 詳しくは土屋英明著、文春新書四四九『中国艶本大全』（文芸春秋、平成十七年）一二四―五頁を参照。

注 11 引用は注7と同じ。

注 12 引用は注5と同じ。

注 13 引用は荘司格一、清水栄吉、志村良治訳『中国の笑話・笑海叢珠・笑苑千金』（筑摩書房、昭和四十一年）に翻刻された『笑海叢珠』による。底本は仁興堂刊行本。

注 14 引用は古谷知新編『滑稽文学全集』（文芸書院、大正八年）第十一巻による。

注 15 武藤禎夫編『江戸小咄類話事典』（東京堂出版、平成八年）第二章「大ばなし」所収「外科の継ぎ遣え」の条（九十三頁）を参照。

注 16 引用は、北原保雄・小林賢次著『狂言六義全注』（勉誠社、平成三年）による。

注 17 引用は李家源編『滑稽雑録』（음계잡록）（民衆書館、一九七七年）に翻刻された『禦眠桶』による。底本は民俗資料本の祖本と見られるが不明。

注 18 引用は日本古典文学大系八十五渡邊綱也校注『沙石集』（山岩波書店、昭和四十一年）の「拾遺」による。

注 19 南方熊楠は「続南方熊楠隨筆」（『南方熊楠全集』（平凡社、昭和四十六年）第二巻所収）の中の「羊を女の腹に画きし話」の項（四六九―四七〇頁）で、この艶笑譚の類話が、『笑林広記』所収「換班」にも存することを指摘している。熊楠が訳した『笑林広記』の類話によれば、夫が妻のほとりの左傍にひとりの「早隼（筆者注・番人）」を画しておくが、問男が間違えて右傍に画くとある。熊楠はさらに、ヨーロッパで刊行さ

れた書に見られる類話について次のように紹介している。「たとえば十六世紀に刊行せる書に、画工旅するとして、若き艶妻の腹に羊を画き、おのれが帰り来るまで消さぬよう注意せよ」と命じ、出で行きし跡に、好色未娶の若き商人来てかの妻を姦しおわりに、前に無角の羊なりしが消え失せたるゆえ、角ある羊を画きしという譚見ゆ。」本稿で紹介した『続禦眠桶』所収「蜚蜚弁鹿」には、臥していた鹿の絵が立っている鹿の絵に変わるとあるが、これは、『沙石集』に見える「臥せる牛」が「立てる牛」に変わる内容とほぼ似ている。さらに、『続禦眠桶』には臥していた「鹿の角」が立つという内容も見られるが、これも「羊の角」が見られるヨーロッパの類話とよく似ている。ちなみに、右の類話である『笑林広記』所収「掘荷花」には「はすの花」が出てくる。

注 20 引用は注9と同じ。

注 21 引用は注3の前掲書第二十巻に影印された『奇談新編』（天保十三年刊、一巻一冊）による。

注 22 引用はソウル大学奎章閣図書館所蔵写本（書写年次未詳、三巻三冊）による。

（ぐむ よんじん・立教大学日本学研究所特別研究員）